地域研究　№13
2014年３月　41-65頁

The Institute of Regional Studies, Okinawa University
Regional Studies №13　March 2014 pp.41-65

沖縄社会におけるコミュニティの変貌とは
―那覇市三原地域のオーラル・ヒストリーを通して―

小笠原　　快*

Changes to Community in Okinawan Society
―Oral History of the Mihara, Naha-shi Area―

OGASAWARA Kai

要　旨

沖縄県の中心部である那覇市は、「協働のまちづくり」を掲げており、地域社会で課題となっている少子高齢化や、孤独死、虐待、災害等の社会問題に対して住民と行政が一体となり、課題解決を目指す仕組みづくりに取り組んでいる。

本論では、住民同士が積み重ねてきたコミュニティの歴史に、まずは注視しながら検討していくことが課題解決を探るうえで重要だと考え、長きに渡り那覇市内で生活を重ねてきた住民からコミュニティに関する聞き取りを行い、過去から現在までのコミュニティの変貌について明らかにしていくこととした。

考察では、過去に豊かなコミュニティが複数存在していたことが分かる一方で、都市化や少子高齢化といった社会変化の中でそれぞれのコミュニティが縮小や統合を重ね、衰退していることが見えてくる。また、それぞれのコミュニティに接点がないことで、お互いに知らず、支え合うことも出来ないことが見えてくる。だが、第３者がつなぎ役となり、それぞれのコミュニティが知り合うと、お互いを支え合う関係が生まれてくることも見えてくる。さらに三原で、地域の大人から見守られて育った子ども達は大人になると、自らが見守る側の大人になっていることも分かってくる。

キーワード：少子高齢化、閉じられた自治会、つなぎ役、地域の大人

Abstract

Residents and administration in Okinawa are united in their concern for social problems, such as low birthrate and increased longevity, solitary death, abuse, and the consequences of disasters. Naha, the capital of Okinawa Prefecture, is tackling the development of a structure that aims at a business solution.

When examining such a community, it is considered important to explore its history,

* 沖縄大学地域研究所特別研究員　elephantminor.kai@hotmail.co.jp

which residents have accumulated as the main subject of business solution development. Consequently, we conducted a process of listening comprehension with long-time residents of Naha, who were similar and came the life in piles in passage Naha,and clarified the changes that had occurred in the community.

Our research reveals that while several communities with a rich heritage existed, each community experiences reduction and integration, and decline because of societal changes, such as urbanization, and low birthrate and increased longevity. Moreover, because there is no point of contact between communities, they are unable to support each other. It is only a third party intervention that connects the communities into a mutually supportive relationship.

Furthermore, when the children growing under the watchful eyes of the adults of the area become adults themselves, they watch over the generation that follows.

はじめに

沖縄社会には「ユイマール」や、「模合」等の住民同士の相互扶助が根付いていると言われている。だが、都市化や少子高齢化の波は沖縄にも届いており、地域の人間関係が希薄になってきているとも言われている。それは、都市部の那覇市においても同様のことである。

現在、那覇市では住民と行政が協働したまちづくりを掲げ、様々な対応や仕組みづくりを模索しているが、今後さらなる方策を検討、展開していくことが望まれるだろう。

1．研究目的

まちづくりにおいて、新たな方策を検討、展開するにあたり、地域で生活し、コミュニティを積み重ねてきた住民が、コミュニティの変化について、どのように感じているのかを知る事はまちづくりの第１歩として重要だろう。

これに関してまちづくり研究を行う後藤は、「(まちづくりとは過去の)コミュニティによって受け継がれた「地域遺伝子」の発見を通して、「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描くことがその第１歩なのである[1]」と述べ、過去のコミュニティを見つめる事は現在のまちづくりにも活かすことのできる視点があると述べている。

こういった点からも住民たちが積み重ねてきたコミュニティについて、注視していくこととしたい。

そのため本論では、地域で長きに渡り生活を続けてきた住民が、以前のコミュニティと現在のコミュニティとで、どのように変化していると感じているのかを明らかにしていくことを目的とする。

コミュニティとは多義的な意味を用いるが、本論においてのコミュニティとは「一定地域で生活を共にする人々の帰属組織」と定義づける。

2．研究方法

住民の思いを把握するために、本論においてはオーラル・ヒストリーという聞き取り手法

を用いることとする。オーラル・ヒストリーとは「個人の視点をもとに歴史と社会について考察する―人々にインタビューをしてその録音を資料としてそこから出てきた問題を検討していく」という手法であり、本論においての住民の想いに迫るには最適な方法であると考え、用いる事としている。

また、オーラル・ヒストリーでは５名の住民から聞き取りを行っている。それは複数の住民から聞き取ることで、コミュニティについて、多角的に検討することができると考えたためである。

３．研究・調査対象

研究地は那覇市内にある三原地域（以下三原）としている。研究地として三原を選定した理由は、現在の那覇市の特徴的な像と、三原地域の現状が重なると考えたからである。具体的には、少子高齢化が進行している地域であることや、住民が集う場所が不足しており、中心地がないということなどが挙げられる。

また、三原は筆者が当時、在住していた地域でもあり、コミュニティを内部から捉える参与観察が本論においては最適であると考え、那覇市三原を研究地とすることとしている。

つまり、三原を研究することにより、那覇市内の複数地域のコミュニティ像を浮かび上がらせることができるのではないかと捉えたためである。

調査対象者は以下の５名の方々である。

Ａさんは三原で生まれ育ち、現在、同地域で建築会社を営む傍ら、自治会長を担っている。

Ｂさんは沖縄県国頭村出身で、成人してから三原に住む同村の知り合いを頼って、転入している。現在は同地域で商店を営んでいる。

Ｃさんは幼少時代に三原に移り住み、現在も三原で暮らす傍ら、同地域にて空手教室を開き、活動している。

Ｄさんは幼少時代、三原のとなり地域で育ち、結婚を機に三原にて生活を始める。また自身の子育てをきっかけに同地域内の子ども会活動にも携わっている。

Ｅさんは定年退職後に三原に移り住んできた１人暮らしの転入者である。Ｅさんに関しては、三原で長く生活をしてきたわけではないが、三原で繋がりをもたないＥさん（転入者）にとって、三原のコミュニティがどのように見えているのかを把握する事も、現在のコミュニティの姿を浮き彫りにする上で重要であると捉え、聞き取りを行っている。

４．調査期間

調査期間は2010年４月から、2011年12月までの期間で、聞き取り回数は少ない方で２回、多い方では12回の聞き取りを行っている。

５．倫理的配慮

本論は、三原自治会の了解があると同時に、オーラル・ヒストリーを行った５名に関しても、研究趣旨を説明し、研究以外で利用しないことについて了解を得た方々である。

６．先行研究

先行研究として、八尾の「1960年代以降の沖縄における地域社会の変化～ひとりの女性のオーラル・ヒストリーを通して～[2]」がある。以下に先行研究の紹介、本研究との違いについて触れていくこととする。

先行研究では、沖縄県都市部の住民生活の変化について考察することを研究目的として、「沖縄社会が常に変化するなかで住民が自らの生活をどのように変化させていったのか」ということに焦点が置かれている。具体的には住民自身の「行動」に着目している。対象者は1960年代に那覇市で生まれ、現在まで那覇市に在住している女性（以下Ｋさん）である。オーラル・ヒストリーを研究方法に用いた理由は、「彼女の個人史を追うのではなく、彼女が社会に対して感じている様々なギャップとそれに対してKさん自らがとった行動を中心に取り上げる」ことを目的としたため、最適であると判断している。その一方で、オーラル・ヒストリーの聞き取りに関して、Ｋさん一人のみに行なったことについては、「議論を普遍化するには弱い部分がある」とも述べ、研究の課題点を上げている。

先行研究の優れていると思われる点は、過去と現在とを融合する視点である。Ｋさんは過去の住民同士で支えあった地域社会に戻る事を望んでいるのではなく、過去に存在した（Ｋさんはそう感じている）人と人との繋がりを、現在の制度の中で活用して人為的に生み出し、過去と現在を融合させようと努力していることを、八尾が発見した事に共感を覚える。

だが、先行研究では聞き取り対象者が１人であるのに対して、本研究では複数の住民からオーラル・ヒストリーを行っている。また、先行研究ではＫさん自身の「行動」に着目しているが、本研究では「コミュニティ」に視点が置かれているという点においても、違いがあると考えている。

７．那覇市について

現在の那覇市の人口は320,020人で、138,383世帯[3]となる。面積は39.23㎢（沖縄県全体では2274.59㎢）である。

琉球王府時代の那覇は、王都首里の港町として発達し、日本本土、中国、東南アジア等と交易を行う中で栄えるが、1609年の薩摩侵攻後は、薩摩の管理下において中国のみの交易となる。1879年には廃藩置県により政治の中心が首里より那覇に移行する。

その後、徐々に行政区域を広げることとなるが、第２次世界大戦が始まると1944年10月10日の米軍空襲によって、那覇市の多くは壊滅状態となり、行政機能のほとんどは失われてしまう（1945年６月23日に沖縄戦は戦略上、終結したこととなっている）[4]。

戦後直後の那覇市、またその周辺地域（真和志村、首里市など）は米軍に占拠されたため、住民らがそれぞれの地域に戻るまでに時間を要している（1945年11月10日の壺屋への一部住民の帰郷が始まりだと言われている[5]）。また米軍が住居居住地区制限の元、バラバラに土地を解放したことで、都市形成の計画性を欠いてしまう。この事を吉川は「多角的都市[6]」と呼んでいる。

米軍統治下においても、那覇市は隣接する市村合併を検討し1954年に首里市、小禄村、1957年に真和志市を編入し、（当時の那覇市の人口は18万7,256人、面積30㎢[7]）大都市となるが軍用地が主要な部分を占めていたため、公有地である水面も埋め立てざるを得なかった。しかし、ここでも米軍の許可を要したため、埋め立ても計画通りに進行することはなかった[8]。つまり戦後復興を軍政下の元で行わざるをえないということが、那覇市の都市形成にとって大きな阻害要因になったことは間違いないだろう。

８．自治会と郷友会の関係

ここでは、那覇市における特徴的なコミュニティの１つとして自治会と郷友会の関係が挙げられると考え、取り上げることとする。

⑴　自治会について

那覇市の自治会は1960年の自治会制度が始まりで、それまでは区長制度（1908年に島嶼町村制により成立した制度）が自治会の前身として役割を担ってきた（区長制度時代は町内会や部落会という名称等で呼ばれていた）。

自治会の特徴の１つに、町や字などの地域単位に対して１自治会として組織されていない場合がある。つまり１つの地域（町、字）に現地域（現住所）の自治会と、旧地域（旧住所）の自治会が複数存在している場合があるということである。

次に、自治会加入率が全国的に低いことが挙げられている[9]。2013年（４月30日現在）に那覇市（まちづくり協働推進課）の調査で明らかとなったのは市内の自治会加入率が20.9％となっている（三原を管轄する真和志地区に至っては17.1％とさらに低い）[10]。

要因の１つには自治会がそもそも存在しない地域が多い事について触れられている。2010年の那覇市が実施した「那覇市民生活意識調査報告書」において、未加入者に対して自治会に加入しない理由を聞くと「勧誘がない（296人）」、「自治会がない（200人）」、「時間的にゆとりがない（180人）」が上位の３項目にあり、アンケートに回答した1,888人中（100％）自治会がないと答えた回答者（200人）は、およそ「10.6％」に及ぶ。それに対して2007年、内閣府から全国対象で行われた「町内会・自治会等の地域のつながりに関する調査」では、町内会･自治会の有無に関して､「ない」と答えた回答者は全体の「6.4％（1,834人中）」となっており、全国平均に比べ、若干ではあるが自治会が組織されていない地域の多さが、那覇市からは窺えるだろう。

もう１つの自治会加入率の低い要因としては、自治会への加入方法（加入への働きかけ）が挙げられる。加入方法は①全戸加入型②任意加入型③郷友会型の３タイプがあると言われている。全戸加入型とは、その地域に在住する住民は基本的に全て加入するもの、任意加入型とは勧誘はするが（もしくは勧誘もしない）住民の判断に委ねているタイプのこと（積極的に勧誘する自治会もあるが少ない）、郷友会型は（郷友会について詳しくは次項で触れる）旧地域の頃からの住民や出身者、さらにはその親族らによって構成されているものと、同郷出身者が他地域に移動し、そこで同郷出身者の集団を形成し、自治会を組織することでその地域に住む同郷出身者やその親族らで構成される２つに大きくは分けられている。そのため、郷友会型自治会のある地域に、何ら関係を持たない人間が転入しても自治会には加入できないのが郷友会型自治会の特徴なのである。

那覇市では任意加入型自治会が最も多いのだが[11]、なぜ任意加入型は転入者に対して消極的な姿勢なのだろうかという疑問に対して高橋は、旧地域からの共有財産が関係していると述べている。共有財産[12]とは元々その地域に住む住民ら（親族関係の場合もある）が共有で保持する財産のことであり、土地、貸家、自治会館、公民館等がそれにあたる。その財産の共有（利益分配）や、管理のために共有財産を持つ任意加入型自治会では新たな転入者への積極的な勧誘をしないと言うのである。鈴木も「都市周辺部で「新住民」が増えるとき、土着の旧住民が共有財産への伝統的権利をどう規定しなおすか―新旧住民の混在化の調停がこれからの都市化の一問題となるだろう―本土諸都市の自治会・町内会のイメージは、那覇市の自治会には全く妥当しない。いわゆる全員加入の「町内会」的なるものは存在しないのである[13]」と述べている。つまり、那覇市の多くの自治会は「閉じられた自治会」ということが言えるかもしれない。

⑵　郷友会について

郷友会とは「郷土を同じくする者が、移住先で結成した組織[14]」と言われ、自治会が居住地を単位に組織する一方、郷友会は郷里（地元）を単位にするという違いがある。会の目的には親睦や相互扶助[15]が主なものである。

那覇市においては、1955年頃から基地建設等で経済が活発化した事で、農村から都市への大幅な人口流入が見られるが、多くの都市に流れ込んできた人々はそれまで他の地域住民と接触する機会はほとんどなく、言葉や生活慣習等への苦慮も含め、単身で出てくる人間は同郷や血縁関係者を頼って那覇に出てくるものが多く、さらには1960年代以降の行政機関の就職斡旋機能の整備、充実等がなされるまでは郷友会を通じた知人の就職斡旋により働き口を見つける人間も多かったのである[16]。ちなみに1950～1970年代において郷友会の結成が全体の70％以上[17]と言われ、郷友会の結成と都市における雇用との関連性は大きいと言えるだろう。

那覇市における郷友会の数は200以上あると言われ、「小字単位でつくられているレベルの

もの、旧村であるシマを１つの単位としてつくられている100人から200人程度の、メンバーによって構成されているもの、市町村を１つの単位とした１万人以上の構成メンバーを擁するような大規模なものなど[18]」があると言われ、その構成や形態は一様ではないことが窺えるだろう。

ここまで郷友会について見てきたが、先に触れた自治会との機能において関連性が高いという事が言えるのではないだろうか。このことに関して高橋は、「形態的には異質であるにしても―その機能は基本的に等価できる[19]」とも述べており、郷友会とは自治会機能の代替的役割も果たしていると見る事ができるだろうか。つまり郷友会の存在が自治会の必要性を弱めてきたとも言えるかもしれない[20]。

しかし、郷友会組織の高齢化は進んでおり、居住地を基盤にした自治会への関心が高まる（シフト）可能性があるとも考えられている[21]。

９．三原について

三原は那覇市真和志支所管内に属しており、現在は１丁目から３丁目までがある。2011年11月末現在で3203世帯（１丁目1,056世帯、２丁目1,357世帯、３丁目790世帯）、7,188人（1丁目2,277人、２丁目3,034人、３丁目1,877人）[22]が生活している。

三原は戦前、大道地域に組み込まれており、当時は大道前の原（だいどうまえのはら）という名称だった[23]。当時の大道前の原は30世帯程で、田畑を耕し生計を立てる家がほとんどであったが、村で運営する製糖工場もあった。またこの頃、共心団（現在は共心会という名称に改める）という、当時の住民達で結成した郷友会も生まれている（1927年頃）。共心団では当時、講摸合、学事奨励会や懇親会、新年宴会、遠遊会等が盛んに行われ、住民同士が支えあうと同時に親睦を深めていた。

しかし沖縄戦が始まると、自身の家々を離れ、疎開を余儀なくされている。その後、終戦となり三原を包括する真和志村は米軍占領化となっており、立ち入り禁止地域に該当したため、住民らは家へ帰ることができなかった。1946年４月には豊見城へ移動し、８月には小禄、真和志への住民移動許可が出されたことで続々と村民が自らの地域に戻り、1947年６月には全ての村民が移動を終えている[24]。

だが、大道前の原（三原）に戻っても、ほとんどは米軍の燃料、脂類の集積所となっており、そこでは米兵の厳重な警備の中で怖々しく農作業を行うこととなる。その後、しばらくして軍用地が解放されるも、そこは農耕地の様相をなくした土地となっていたのである。

また、1947年には台風に襲われ、木造建ての多くの家々は吹き飛ばされてしまうが、壊れた家々に対して住民は組を作り、復旧作業を共同で行っている。そんな頃、他地域から多くの住民が大道前の原に転入してくるのであった[25]。

1949年１月には大道が人口急増した影響により、新たな区として三原が設立されている[26]（三原という名称は当時の大道前の原地域に在住する住民同士で話し合い、「大石原、伊是名

前原、佐久真原」の３つの原名を合わせて三原と命名している)。当時の人口は365人・63世帯[27]で、この時、「地域の生活環境の改善を図るとともに、居住者の親睦と連携を深めること[28]」を目的に、三原自治会も発足されている。

1953年には急速な人口増加や、都市化に伴い真和志村は、市に昇格している。その際、市長となった翁長助静の挨拶は、「真和志市の特異性は、総人口の70％を他市町村からの転入者が占めていることで、旧来の地元人口と転入人口の比率がこのような実情にあるのを鑑みて痛感することは、出身地の如何を問わず全市民が渾然一体となって、新真和志市の発展興隆に大和一致の実を挙げて貰いたいことである[29]」と述べている。

これは戦前の農村中心であった地域が、戦後、転入者が爆発的に増えたことも重なり、７割を超す多数派である転入住民と、３割の少数派である地元住民に対して市長は連帯を促しているのが分かる。

創立５年の1954年には、人口が年間1,000人以上増加し、総勢6,000人を超え20倍近くの人口増という状況が生じている[30]。

しかし、1957年には真和志市は那覇市と合併し、４年という短い真和志市としての役割を終えている。三原に関しても同年、戸籍法が成立し、臨時戸籍（戸籍整備法）が失効したことで、元の大道に戻ることとなるが[31]、1980年９月に三原は、新住居表示の町界町名整理によって、大道と分離し、再び三原が誕生している[32]。その時の人口は9,000名弱、世帯数は約2,700であった。しかし、1982年の9,056名をピークに徐々に人口は減少し、1998年には、8,000名を割り始める[33]。

一方、世帯数に関しては緩やかではあるが、上昇傾向にあり、図１の５年毎の国勢調査からは人口減少が進む一方で、世帯数が増加している事が分かる。また図２を見ると、三原地域の生産年齢人口（15～64歳）は徐々に減少傾向にある。また、2000年に老年人口が年少人口を逆転して老年人口が上昇する一方で、年少人口は減少を続けていることも分かるだろう。つまり三原地域は少子高齢化の進行が顕著な地域の１つとして挙げられるだろう。

現在、三原の郷友会「共心会」では講摸合、敬老会、遠遊会（ピクニック）等の活動が継続的に行われている。会員数は73世帯（2006年１月現在）と、ピーク時の92世帯に比べて減少傾向にある。その点について会長は、共心会80周年誌の中で、「今後、会員の増強に取り組んでいく必要がある[34]」と述べている。一方、三原公民館の土地と建物は元々、共心会のものであったが、現在は自治会に寄付したかたちとなっており、共有財産なるものは残っていない。

次に三原自治会について触れる。先の加入方法の中では、三原自治会は任意加入型自治会に該当する。活動内容は敬老会、グランドゴルフ、大掃除といった活動から地域内の多くの外灯維持（電気代）を行っている。そのため、年間3,000円の会費が徴収されている。現在、自治会加入率は13.1％[35]と真和志地区の17.1％よりも低いことが分かる。自治会役員（評議員）は会長含め10名程。定例会議は月１回程度で、下部組織なるものはない。

評議員の多くは仕事を持っており、自治会のパートスタッフ１名が主に会費徴収に回らなくてはならない状況にあり、自治会未加入世帯への勧誘は行えていない状況にある。

また、三原公民館では自治会や共心会活動の他に、空手教室や琉球舞踊、三線教室等の習い事利用や、那覇市地域相談センターによる介護予防事業等の利用のため公民館ホールの貸し出しを行っている。

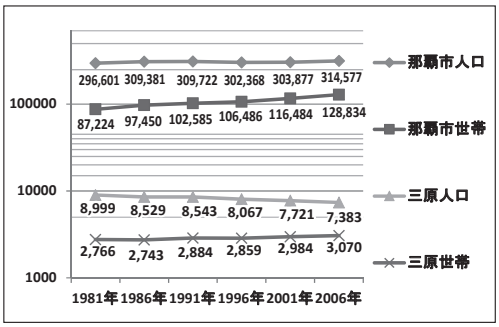

図１　那覇市三原地域の人口・世帯数の変化
（国勢調査参照より筆者作成）

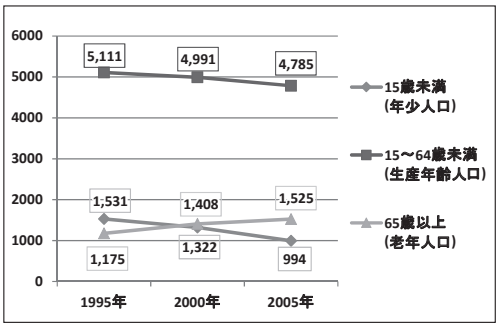

図２　三原地域における３階層別人口構成
（国勢調査参照より筆者作成）

10. 事　例

５名の方のオーラル・ヒストリーをここでは見ていくこととする。

(1)　Ａさん（男性）

1940年生・70歳（2011年時点）

Ａさんは戦前、三原地域で農家を営む家庭の10人兄弟の末っ子として生まれる。三原で高校生までを過ごし、23歳の時に建築会社に就職する。その後、独学で１級建築士の資格を取得し、28歳の時に結婚。５名の子どもを授かる。41歳で建築会社を辞め、三原内にある兄の設計事務所に活動の拠点を移す。その頃から共心会に顔を出し始め、地域住民との交流も始まる。また、そのことで自治会とも関わりを持つようになる。郷友会、自治会では役員を経験し、現在は自治会長として地域のために尽力している。

１）遊び（1950年代）

（子ども時代は）かけっことか野球したなぁ。野球って言っても紙のボールと、米軍のテントで作ったグローブと、そこら辺に落ちてる折れた木がバット代わりだったな。当時はそこらへんの道路で野球してたな。トラックとかも見たことなかったしな。馬車道だったんだよ。

２）手伝い（1950年代）

親父によく丸元って酒造所に酒を買いにいかされたな。親父は「かけ（売り）してこい。」って言うんだ。だから取ってくるだけ。そこは親父の土地を借りてやってたから、行ったら「はいはい、いつものね」って渡してくれた。親父は後から金を払ってたから全く問題はなかっ

たな。

３）地域の大人（1950年代）

家はいつも親父が宴会場にしておって、近所の大人達がいつも出入りしていたなぁ。親父が貸してる土地に住んでた大人達がほとんどだったな。親父は子どもらから注意されても酒を止めなくて、自分が高校生まで続いたなぁ結局。

そこでよく世話になってたのが、近所に住んでる親父の弟の叔父さんと、従兄弟の兄さんだった。酒を飲みすぎる親父に注意してくれたんだが、最後は一緒に飲んだくれてしまってたなぁ。しかし程良いところで帰ってったよ。

４）スーパー（1980年代）

うちの土地にスーパーができるまでは、３つくらい近所に商店があったが、30年前くらいにスーパーができてからは、どんどん無くなっていったな。商店っていっても、大したもんはおいてなかったよ。だからスーパーができて便利になったがなぁ。

５）地域で気になること（2010年代）

子どもが少なくなって寂しい。子ども会の運営が行き届かなくなってきている。子どもが減っているのも事実なんだが、少ないなりの活かし方がないのかと思うんだが、現在は５班まで子ども会はあるが、１，２班と３，４，５班合同で行っている。それぞれで行っていければ良いと思うんだがなぁ。

６）土地について

三原は借地が多いから、近くにマンション買って他に出てったり、違うとこに一軒家買って出ていくさ。地主は土地を手放さない人が多いから。三原には分譲マンションほとんどないさ。一軒家なんてもっとない。だからアパートばっかりさ。

７）三原区自治公民館の成り立ち

公民館の土地は元々、共心会のもんで、この建物も共心会が建てたもんなんだよ。今は自治会に建物を提供したかたちになっているがな。

８）自治会活動

年に１度の敬老会とグランドゴルフ。それから大掃除くらいだな。今後は新年会も開きたいと考えている。評議員の皆さんには定期的に集まってもらい定例会を開いているよ。

だが私が自治会長になるまでは、（以前の自治）会長が１人で活動してたし、私が評議員になった時も名前を貸す程度で集まりなどなかったな。だから当時は「こんなものなのかなぁ」と思った。その前も、自治会が活発な時など全くなかったよ。

⑵　Ｂさん（男性）

1929年生・82歳（2011年時点）

Ｂさんは国頭村奥にて３人兄妹の長男として生まれる。高校卒業後は普天間で基地関係の仕事や、地元の共同売店の仕事等を転々とする。その後、知り合いを頼って那覇の琉球石油

に就職。1956年に母と弟も那覇に来る事となり、三原内に、国頭村出身者が多く住む地域に家族３人で移り住む事となる。31歳の時、国頭から近所の親戚を頼りに移り住んできた女性と結婚。

60歳になる頃に家の前で商店を営む妻の伯父が亡くなる。そこでＢさんが商店を引き継ぐこととなる。商店主として妻とも協力しながら充実した日々を送る。しかし、近隣の子どもたちが地域から巣立ったことや、高齢者らが亡くなったり施設入所することで近隣から住民が減少していくことを身に沁みて感じるようになる。

１）子育て（1960年代）

子どもが小さかった頃は、ここら辺に住む家族らと一緒に車で、東南植物園とか大里公園も行ったし海にも行ったな。けど子どもらが大きくなってからはそういったのはなくなっていったけどな。

２）道路の舗装（1960年代）

大雨が降ると道が歩けなくなんだよ、泥道だからな。そうすると川の水位も上がって、家が何度も水浸しになったよ。何回近所の家の畳ひっくり返したか。だからこの辺に住んでる市議会議員に言って、舗装用の道具を借りれるようにお願いしたんだよ。それで、ここら辺の住民で協力して、行政の力も借りずにやったんだよ。

３）飲み会（1980年代）

店（商店主）やる前から近所付き合いあったよ。やんばる（国頭村出身者）の人達だけだったからやりやすかったよ。商店前のテーブルで毎晩飲み会だったな。となり近所帰ってきたら飲んでたよ。23時くらいまでかな。５～６人はいたな。親睦摸合ってのもやってたんだよ。けど、いつの間にか立ち消えてたな。摸合をしたのは１年くらいだったかな。

４）売れていた商店（1990年代）

野菜とか豆腐とかそうめん、米なんかも売れてたな。食料品は売れてたかな。米は年寄りの家に配達していたしな。今も２軒は届けてんだよ。後、前は魚商も来てて、店の台所で魚をさばいたりもしてたよ。

当時は年寄りが多かったから牛乳とかは今の何倍も仕入れてたが、それでも売り切れることがあったな。野菜や卵とかも多く仕入れて店先に出してたよ。

５）地域の変化（2000年代）

商店始めた時は近所に年寄りも多くて、歩いて来られることもあったから、利用者は多かったな。年寄りが店先に集まって、ゆんたく（会話）してたんだよ。

けど今じゃ、そこの年寄り達も亡くなったり施設に入ったりでな。そこの駐車場も昔は家だったんだよ。けど、いなくなって全部駐車場になっちまった。あの駐車場に4.5世帯は入ってたんじゃないか。人によっちゃ、大家が駐車場にするってんで、出ていかなきゃいけないのもいただろうし。俺だって（家の土地を借りてる身だから）出て行かなきゃいけなくなる時がくるかもしれねぇんだよ。

子どもも昔と比べると、かなり減ったな。そこにマンションが出来たから、なんとか子どももいるが、マンションンが建たなければ子どもはほとんどいなかっただろうな。当時、小学校は１学年６クラスくらいあったんだよ（現在は３クラス）。この商店前の通りも通学路として、子どもがたくさんで賑やかだったんだけどな。今じゃあ数人だよ。見ての通り、人が集まらん老人通りよ。人がおらんのだよ。人がいなくなったのは10年くらい前からかな。年寄りもいなくなった。（当時を振り返り）夢物語よ。

６）自治会加入について

前の自治会長が（小学校の）交通安全の旗振りで知り合いだったんだよ。そんで自治会に入ったんだよ。けど、１度敬老会行ったんだけど打ち解けられないわけよ。全部地元の人だったよ。地元の人同士だから昔の付き合いがあるよな。２人知ってる人いたけど、挨拶程度しかしない仲だったよ。それっきりその後は参加していないな。知り合いがいれば参加しても良かったんだが。

結局、三原と言ってもとなり近所だけで三原全体っていうのはないわな。みんな自分の生活だけだからな。それに、自治会って言ってもほとんど地元の人が中心さねぇ。けど寄留民（転入者）の方が（三原地域には）多いんだけどな。

⑶　Ｃさん（男性）

1947年生・64歳（2011年時点）

Ｃさんは本島南部で生まれるが、父が那覇出身ということもあり４歳の時に三原のとなり街に家族で越してくる。その２年後には三原地域に引っ越し、高校までは三原から通っている。学生時代は柔道、空手などの武道に打ち込み心身を鍛え上げる。

大学を東京で過ごした後、沖縄に戻る。いくつかの仕事を転々とした後、29歳の時に結婚して３人の男の子を儲ける。その後、実家そばの三原のアパートで暮らし、両親が他地域に移った後は、両親が住んでいた実家に移り住むこととなる。

仕事は最終的に基地関係に就き、そこでは米軍兵士らに空手を教えていたことも。その間、自身が暮らす通り会の会長も担っている。退職した現在は、三原地域内に立ち上げた空手道場の師範として、子どもから大人まで幅広く指導を行い、充実した日々を過ごす一方で、三原自治会評議員としても活動している。

１）風呂屋（1960年代）

当時、今の給油所の奥にお風呂屋さんがあって小学生の時は行ってましたねぇ。家にも五右衛門風呂があったから、週１回行けば良かったんじゃないかなぁ。風呂屋が情報交換の場になってましたねぇ。いつからか、なくなったんですよねぇ。

２）広場（1960年代）

昔は広場もたくさんあってですねぇ、畑とか小川もあって。草原みたいなとこもあったねぇ。友達とよく遊びましたね。大人のコミュニケーションの機会にもなっていたと思うん

だよねぇ。川なんか今は埋め立てたりして無いからねぇ。

（現在は）土地問題とか色々難しい問題はあるからなんとも言えんが、空き地を子どもや年寄りが集まれる広場にできたら良いなぁ。憩いの場ですねぇ。小川とか飲み物も飲める屋根のある場所にねぇ。

３）雑貨店

雑貨店が現在も２軒残ってる店がありますねぇ。50年以上ありますねぇ。１軒のおばあちゃんは90歳以上になるかなぁ。この人は暗算が凄いんですよ。誰かがケチつけたりすると、怒鳴って帰すんですよ。こういう人が情報握ってるんですよね。誰々が赤ちゃん生まれたとか。

４）地域の大人との関わり（1960年代）

どんな悪いことでもすると地域の全ての大人が注意してましたよ。悪い事をすると大人の目が怖かったですねぇ。この人に見つかったらやばいなとか。こんな存在が良かったんだろうなぁ。

家のとなりのおじさんで、この人は父親と同じくらいの年齢なんですが、とっても優しくて自分の親みたいに慕っていましたよ。私が大人になって一緒に飲みにいったこともあります。私の親が気づかないところで私のことを配慮してくれていたと思いますねぇ。その方は、もう亡くなったんですけど地域で生まれて地域で死ぬ、そういう人が地域にいるってのは幸せなことだと思いますねぇ。

５）現在の大人の姿勢

原則として他人に干渉しなくなる。子どもが悪いことをしても他人の大人には言われたくないと親も思っている。子どもが煙草を吸ってても、注意しない大人もいるし、学校の先生でも他の学校の生徒は注意しないこともあるからねぇ。昔は地域のみんなで（子どもを）育ててたけど都会化する難しさだなぁ。

６）通り会会長としての活動

通り会の街灯代（会費）集めるくらいかなぁ。後は、草刈りを集まってしたりしてましたねぇ。昔は那覇市から材料借りてきて、近所の若い連中集めてローラーで歩道整備をやりましたねぇ。

７）住民の温度差

通り会のお年寄りから、「食事会してほしい」って言われたんですけど、地方からでてきた人からは、「田舎の閉鎖性とか右が決めたら右になるとかが嫌で那覇にでてきたのに、どうして縛られなきゃいけないんだ」って言われたりもして。それから会費は出すが一切関わりたくない、喋りたくもないという人もいたりして、困りましたねぇ。結局、それをまとめるのは出来なかったですねぇ。後、親世代は入っていたけど、子ども世代は通り会に入りたくないってのもいて。困りましたねぇ。

８）自治会への統合

私が（通り会の）会長になった時は、32世帯だったんですが、自治会に入る（統合）とき

には24世帯くらいになってましたね。今なんて10世帯くらいじゃないかな。家が老朽化して、立て替えようとしても、消防法にひっかかって新築に出来ないんですよ。しかし、家を取り壊して空き地になっても雑草ができるし、そしたら不法投棄されたりもしましたねぇ。

自治会に入るきっかけは、通り会で小学生のいる親から、「自治会には子ども会があるから、通り会でも自治会に入りませんか」って言われたんです。通り会の規模も小さくなってたし、自治会と一緒にしてもらうのが良いかと思ってそうしたんです。でも、この時にも通り会の１部の方からは「会費は払うが（自治会と）、一切関わりたくない」って方もいましたよ。

ですが、私自身も自治会に入るまでは、自治会と関わったこともなければ、自治会の存在も知りませんでしたね。自分の地域（通り会）だけでしたねぇ。

９）少子高齢化（2010年代）

子ども達がいないのは確か。毎日のように子どもの声が聞こえていたが、聞く事自体ない。前は子どもの声がうるさいくらいあったが、今はないなぁ。老人がカート引く音くらいですねぇ。老人は昔から多かったと思いますがねぇ。子どもの声はうるさくても癒されますよねぇ。子どもの声が聞こえないと、老人にとっては孤独感感じるんだと思いますねぇ。

10）地域に対する意識

私の子ども、孫たちの世代から意識が違う気がする。「地域に関わりたくない」、「地域のためになんとか」っていうのはなかなか難しいと思いますねぇ。理由は様々あるだろうけど、夜働いている人は昼間寝ていてコミュニケーションが取りづらいし。都会化の影響なんだろうなぁ。仕事のためにコミュニケーションが遮断されてしまうんだよな。

⑷　Ｄさん（女性）

1957年生・54歳（2011年時点）

Ｄさんは三原の隣地域で生まれ育つ。三原には父の会社があり、遊び場として父の会社の駐車場でよく近所の子ども達と遊んでいた。そういったこともあり、三原には幼少時代から親しみを感じていた。県内の高校を卒業後、東京の洋裁専門学校へ通う。卒業後は沖縄へ戻り、那覇市内の宝石店で勤める。結婚後には父の経営する三原のマンションに移り住み、３人の子どもを生み育てている。

Ｄさんは長男が小学生になったことをきっかけに、三原内にある子ども会と関わり始める。子どもたちが大きくなった現在でも、子ども会のサポート、助言役として関わり続けている。他にも高校ＰＴＡ、三原自治会評議員等、様々な地域活動に現在も携わっている。

１）遊び場（1960年代）

父の会社が三原にあったので、よく三原では遊んでいました。今の住宅街になっている多くの場所は、当時は川や原っぱでした。そこで花摘みをしたり走り回ったり、水遊びをして過ごしていましたね。けど、よく遊んでいた遊び場は親の会社の駐車場とか自宅の庭で、近所の子ども達と走り回って遊んでいた記憶がありますね。小さい子から、大きい子まで年齢

に関係なく皆で遊んでいましたよ。

２）母親同士（1960年代）

子どもの頃、友人たちと私の母親同士が仲良くて、母親同士が順番にといった感じで子ども達をまとめて近所の映画館に連れていってくれたり、国際通り近辺のデパートに連れていってくれましたねぇ。

３）友人

三原に住んでいた子どもの頃からの友人はほとんどいなくなりましたねぇ。結婚とかもあるんだろうけど、元々住んでいた家がアパートとか借家で、ほとんど引っ越してったわ。他の所で家を建てたり、マンションに引っ越してったんでしょうね。だから昔からの知り合いは、三原にはほとんどいないんです。

４）子ども会に関わる（1990年代）

６年生の親が子ども会の運営を行うっていう流れが三原にはあって、長男が６年生になった時に、子ども会と関わり始めたんです。それまでは子ども会主催のラジオ体操に長男と参加するくらいだったんですけどね。当時は三原に15くらいの班（子ども会）があったんです。それぞれに「～会」というような名前が付いていたんですよ（現在では１班、２班と呼ぶ）。今は子どもが減ってしまったことで５班に合併して活動していますが。

５）子ども会と自治会のつながり（2000年代）

長男が通う小学校には当時、「子ども連絡協議会」というものがあって、それぞれの地域の子ども会が一同を介して「もちつき大会」、「球技大会」など一緒に行っていました。1990年頃には小学校に１学年８クラスで全校生徒1,000名くらいは、いたんですよ（現在は１学年３クラス）。

けど、子どもが減ったり、協議会を中心で運営する人が引退してしまうと、連絡協議会はなくなってしまいました。そういったことが影響して、三原のこども会の活動も停滞してしまうんです。それを危惧した当時の小学校の校長長先生や先生方が、学校の中で子ども会を復活させて、それを地域に返していこうっていう活動を始めたんです。それで、校長先生は三原自治会の総会やパトロールにも積極的に関わりをもってくださったりして、私自身もそこから三原自治会と関わりを持つようになったんです。

私は当時、子ども会には関わっていたんですが、自治会とは関わる機会がなくって。そもそも自治会の存在も知らなかったんです。ですけど、校長先生が地域に出ていってくれたことで、それまで小学校の親同士の繋がりのみだったのが、小学校の繋がり以外で、三原の方々とも繋がれるようになったんです。

子ども会と自治会が繋がり始めてから、夏休みに小学校でやっているプールの監視役に、自治会会長や評議員の方々も協力してくれるようになったんです。プールの保険代も今までは各世帯に徴収していたんですけど、当時の自治会長が配慮してくださって、自治会に加入しない世帯の子どもでも三原の子どもは、自治会が負担してプールの保険代を払ってくれる

ことにしてくださったんです。

他にも子ども会でやってるラジオ体操への協力だったり、子ども会として（沖縄市）こどもの国への遠足にも自治会の皆さんが引率してくれました。そういったことがきっかけで、当時の自治会長から子ども会の代表ということで、自治会の評議員になることになったんです。

６）親の変化

子ども会で言うと、何かにつけて参加しない親が増えてきているように思います。昔は「やらなきゃいけない」だったのが、今は「やらなくてもいいよね」という雰囲気があるような気がするんです。

昔は忙しい中でも、合間を縫って子ども会の活動に参加していたけれど、様々なことを理由にして、参加しなくなるような親が増えたように感じますね。現在子ども会で活動中の親も、自分の子どもの代までで「後のことは知りません」と言うようなはっきりとした線引きをしている親の考えも感じます。

だから次の代への引き継ぎはあまり意識されていないように思います。どうしてそうなるのかはよく分かりません。難しいですよねぇ。

でも、私達自身も若い時は上の世代の親たちから同じように思われていたのかもしれないし、自分自身、周りが見えていなかった気もするんです。ずっとこういう流れはあるのかもしれないですね。そう考えると面白いなぁと思いますねぇ。それに前年度まで行っていた子ども会の活動が全てではないし、それを現役の親が前年度までのものを意識し過ぎないよう、昔から関わっている親が現在の子ども会に多すぎないことも大切だと思いますけどね。

７）自治会（2010年代）

まだ、自治会が地域のものになっていない気がするんですよね。私自身、自治会を知ったのは３番目の子どもの時ですからね。３人の子ども達は三原公民館の目の前の幼稚園に通っていたんですよ。公民館の存在は知っていましたけども、自治会の存在は知らなかったですね。

⑸　Ｅさん　女性

1932年生・79歳（2011年時点）

Ｅさんは沖縄県内の離島にて５人姉妹の３番目として生まれ、終戦後の中学卒業まで離島で家族と生活する。その後、看護師になるため、親元を離れ、沖縄本島に１人で渡り、看護学校に入学する。看護学校卒業後は看護師として県内の病院数か所で働いた後、沖縄整肢療護園にて定年退職まで働いている。１人身であったこともあり、妹の娘を養女として迎え入れている（養女は現在、結婚して東京で暮らしている）。

居住地は職場の寮などを転々とした後、離島から越してきた両親が住む那覇市寄宮地域で、両親と共におよそ30年間暮らすこととなる。その後、両親の他界や借地であったことにより

自宅が立ち退きとなり、10年程前に三原に引っ越してくる。

最近までは、趣味の英語を習いに教会に出向くなど行っていたが、病気や持病の腰痛悪化も重なり、現在は週２回のリハビリ以外ではあまり外出ができていない。

１）地域に関心をもつ（2000年代）

（地域に関心をもったのは）仕事を定年退職して、老人になってからですよ。三原に引っ越して、老人の集まりないかなぁ、挨拶したいなと思いましたよ。よその地域きて友達欲しかったんです。

２）転入者の実感

近所の方と関わりがなくて寂しいです。おとなりも全くの他人だもの。寄宮に住んでる頃は（近所同士）声掛け合ってたわよ。食事だって一緒に食べたこともあったし。何日か見かけないと「気分悪いのか」って声もかけてくれたわ。

三原に来たら、まるで外国に来たみたいよ。地域でもっと心と心を合わせる必要を感じるわ。寄宮にいる頃は仕事ばっかりしてるから自治会にも入ってなかったけど、こっち来た時は自治会の活動とか楽しみにしてたのよ。

けどいくら経っても、入会の誘いに来ないし、だから自治会なんてないと思ってたのよ（筆者を通じて自治会の存在を知る）。今じゃあ活動に参加する体力がないわ。

３）今の暮らしで良いと思うこと

近くにスーパーがあることくらい。足腰の状態が良い時は自分で歩いて買い物に行くわ。後、介護制度が良いなぁって思う事くらいかしら。ヘルパーが週２回来てくれるのが助かるわ。でなきゃ生きられないですもの。

４）今の暮らしで不安なこと

突然死ぬこと。１人暮らしの突然死の不安よ。だから今、老人施設にも申し込んでるわ。けど建設中で１年半は掛かるわ。自分の健康しか考えられないわ、人の迷惑がかからないように。

５）理想の地域

おとなりとの密なつき合い。もうそれしかない。気遣ってくれるようなつき合いがしたい。「あそこの家、今日出てくるの遅いけど大丈夫かなぁ」って気にかけてくれるようなおつき合い。後、「今度、自治会で大掃除あるけど一緒に行かない」って声かけ合えるような近所になってほしい。そんな人がいたら良いと思うわ。

11. 考　察

５名の住民のオーラル・ヒストリーを通じて抽出された、住民が抱くコミュニティへの思いやコミュニティの変化について考察していくこととする。

⑴　過去のコミュニティ

ここでは住民が、過去の暮らしにおいてコミュニティとどのように付き合ってきたのかと同時にコミュニティとは住民にとってどのような存在であったのかを考察していくこととする。

１）複数のコミュニティ

Ｅさん以外の方々は長年、三原でそれぞれが関わるコミュニティの中で、支えあいながら暮らしてきていることが分かる。

また、幼少時代から三原で生活してきたＡさん、Ｃさん、Ｄさんに至っては血縁、地縁関係の中で、親以外の大人も含めた多くの眼差しの中で育っていることも見えてくる。一方、Ｂさんは、近隣で共に暮らす同郷出身者の中で、支えあいながら生活を営んできたことが分かる。これらを踏まえ、三原には複数のコミュニティが活き活きと存在していたことが見えてくる。

また４名に共通しているのは、当時のコミュニティに対してポジティブなイメージをもっているということであった。

２）様々な交流空間

子ども時代は道路や空き地、川や原っぱ等、地域にある様々な空間が「遊び場」として展開されていた事が分かる。

また大人になると、風呂屋や商店が交流空間となり、地域情報を交換する場になっていたことも分かる。これらの空間は地域内に存在する住民の共有財産であったとも捉えることができるかもしれない。

３）コミュニティからの贈与

オーラル･ヒストリーを通じ、三原地域に何十年と長きに渡って生活を営んできた住民は、それぞれが関わるコミュニティを通じ、苦労や大変な経験もしている一方で、自身の支え（助け）にもなっていることが分かり、住民が生きて行く上で必要不可欠な存在であったことを感じさせる。

それは個人がコミュニティに対して、何かを寄与する以上に、コミュニティから得るものが大きかったということが言えるのかもしれない。鳥越はこれらに関して「有用コミュニティ[36]」と表現し、コミュニティとは個々人がコミュニティに対して何かを与える（奉仕）だけではなく、コミュニティからも何かを個々人に与えてくれる存在であると述べている。

そういった意味では、聞き取りを行った人々は、コミュニティからあたたかい贈物をもらっており、それをコミュニティにお返しする姿が現在の活動等に反映されているようにも感じとれるのである。言い換えれば、互酬性の関係が生まれているとも言えるかもしれない。

以上を踏まえると、過去のコミュニティは、住民同士が支えあいながら暮らしを営んできており、豊かなコミュニティがそこには存在したと考察するのである。

⑵　住民視点からみるコミュニティの変化

コミュニティの変化を考察していくにあたり、まずは５名が感じるコミュニティの変化や現状について、それぞれ整理していく。

１）Ａさん

Ａさんは自治会長として、子どもの減少とそれに伴った子ども会の運営が行き届かなくなっていることに寂しさを感じている。

また、自治会活動については、自身が自治会長になる以前から今日まで活発な活動が行われていないことについても述べている。

一方、三原で設計事務所を営む建築士の視点から、三原には借地が多いことを指摘している。さらに地主が土地を手放さないことで、土地や家を購入したい住民は、必然的に三原外に出て行かざるを得ないとも話している。

２）Ｂさん

Ｂさんは、子育てや道路舗装の協力から、飲み会等、同郷者のつながりの中で支えあいながら暮らしを営んできた。また、商店主としても近隣住民と交流を重ねてきた。

しかし近年、少子高齢化が進行を続ける中で、近隣から住民が減っていくことを目の当たりにすると同時に、商店前を通学路として利用していた子ども達が減ってきていることを実感する。また住宅であった土地も人口減少と借地であること等が影響して、駐車場に変化していくことに寂しさを感じている。

そんな中、当時の自治会長に声をかけてもらうことで自治会に加入し、同郷者以外の地域住民との交流を試みている。しかし、地元出身者の多い自治会で、すでに出来上がった関係の中に入ることへの難しさを感じ、その後は足が遠のいてしまっている。

３）Ｃさん

Ｃさんは子ども時代、地域の大人達から見守られて育ってきたことを振り返り、感謝している一方で現在、地域の多くの大人が子どもに対して無関心になっていると感じている。

また、通り会会長として活動をする中で、住民同士のつながりや交流を求める声がある一方で、それを強く拒否する声もあり、その間で葛藤を抱えていたことも窺える。さらに、通り会の規模が縮小していく中で、自治会に統合することとなるが、その際にも、抵抗を示す住民がいたことも見えてくる。

しかし、Ｃさん自身も知り合いから自治会の存在を聞くまでは自治会の存在を知らず、自身の地域（通り会）だけの関わりであったことも述べている。

４）Ｄさん

Ｄさんは子ども会活動を通じて、三原内にあった複数の子ども会が、少子化により規模が縮小、統合していることを実感する。そんな中で、近隣小学校校長の行動により、子ども会の復活や自治会との連携が生まれ、子ども会が再び活気づいていることが分かる。しかし、少子化のさらなる進行や、親自身の子ども会への関わる意識の低下などにより、再び子ども

会活動が衰退してきていることを感じている。

また、自治会の評議員も務めるＤさんだが、自治会の存在が地域住民全体に浸透していないのではないかと述べている。さらに、Ｄさんは自身が子ども時代からの三原の友人たちは借家住まいをしている人が多く、大人になると、ほとんどの友人が出て行ったとも話している。

５）Ｅさん

Ｅさんは三原に知人や親戚がいない中、１人で転入し、地域住民とのつながりを期待するも、自治会からの勧誘はなく、近所との接点も生まれず、孤独感を抱いて生活していることが分かる。

また、持病の悪化により、三原外での活動も制限せざるえない状況にあり、楽しみとなっているのは、近所のスーパーへの買い物と週2回、ヘルパーが来訪することのみになっている。

⑶　コミュニティの変貌

５名の住民が感じたコミュニティの変化や現状を踏まえ、ここからはコミュニティの変貌について考察していく。

１）少子高齢化

聞き取りを行った複数の住民達は、地域の中で子ども達が減少していくことを強く実感している。そして共通しているのは、少子化が進んでいる事で、地域に活気が失われ、「寂しい」という思いを抱いているということである。これは単純に子どもが減少しているといった数字上の問題だけでなく、住民の思いも伴った問題であることがオーラル・ヒストリーからは感じとれる。

２）交流空間の減少

当時、原っぱや空き地だった場所が都市化により宅地となり、住民同士が交流する機会が減少している。また、風呂屋や商店も住民ニーズが変化した事や、スーパー等の代替機能が生まれたことで必要性が低下し、減少していることが分かる。

さらに、宅地となった場所でさえ、借家の多さが関係して地主の考え方や地主自身の高齢化等で管理できずに、駐車場になるといった事態が生じており、そのことで家を退去せざる得ない転入住民がいることも分かってくる。

これには住民同士が交流できる空間が減少していることに留まらず、持ち家でないことにより住民自身、三原で生活を続けられないといった切実な問題も見えてくる。

３）意識変化

長きに渡り、三原で暮らしを営んできた人々は現在、多くの住民のコミュニティに対する考え方が変化していることを強く感じている。

総務省では地域社会の現状として、「価値観の多様化、プライバシー意識の高まり、地域への愛着・帰属意識の低下等により、隣近所とのつきあいを好まない人が増加している[37]」

と述べ、これらを、「近所付き合いの忌避」と表現しており、オーラル・ヒストリーを行った住民の実感とも結びついていると言えるだろう。

４）コミュニティの衰退

住民の意識変化、交流空間の減少等による都市化の進行や少子高齢化の影響によって、地域内に複数存在していたコミュニティは縮小、もしくは統合、さらには消滅するなどしている状況がオーラル・ヒストリーからは見えてくる。

これらを踏まえ三原地域のコミュニティの変貌、さらに言えば沖縄都市社会（主には那覇地区）におけるコミュニティの変貌とは、「コミュニティの衰退」を意味すると考える。

⑷　コミュニティの課題

ここではコミュニティの変貌を踏まえつつ、現在のコミュニティの課題について考えていく。

１）自治会の存在が地域全体に浸透していない

本論を通じ、三原に存在する、もしくは過去に存在したコミュニティは複数あり、豊かなコミュニティであったことが明らかとなる一方で、それぞれのコミュニティに接点のないことが分かってくる。具体的には自治会と子ども会、自治会と通り会といったものである。

現在では、子ども会も通り会も自治会に繋がっているが、長い間、三原に在住している（転入）住民でさえ、自治会の存在を知らなかったという共通の声が挙げられている。これは那覇市の任意加入型自治会の特徴と類似している（しかし、三原には共有財産はない）。

一方、自治会運営においてパート職員が１人で会費を徴収しているといった人手不足の現状や、役員同士の集まりや話し合いがほとんどなされていなかったことも明らかになる。これらは自治会が組織化されていないということが言えるだろうし、自治会の存在が多くの住民に知られていないことや、自治会加入率が低いこととも何らか関係しているように思う。そして、共有財産のない地域であっても自治会運営の組織化、体系化がなされていない場合があるということも見えてくるのである。

過去に、それぞれのコミュニティが豊かな時代は個々に支えあうことで良かっただろう。しかし、衰退してきている昨今、コミュニティ同士に接点のないことは、地域の中で大きな問題として表出してきているように思う。

今後は自治会を起点にして、地域内に存在する他のコミュニティと繋がっていくことが望まれると考える。

一方で、地域の中で自治会に代わるようなコミュニティ構築のあり方や新しいつながりを模索していくことも重要になってくるであろう。

２）自治会規模が大きい

自治会の存在が地域全体に浸透していないといった課題が改めて見えてきた一方で、3,000世帯7,000人以上の住民が生活する地域を、１つの自治会が下部組織もなく取りまとめるの

は非常に困難なように思う。

「町内会・自治会など近隣住民組織に関する全国調査結果[38]」では、全国における1自治会の全世帯数は、100世帯以下が46.0％と最も高い。1,001世帯以上の場合、4.4％と100世帯以下と大きな開きがある。370万人が暮らす大都市横浜においても、１自治会における平均全世帯数（18区中）は、約430世帯[39]と3,000世帯以上の三原とは大きな違いである。

また、三原自治会には下部組織なるものが存在していないが、全国的には下部組織のない自治会は全体の0.8％[40]と低い状況にある（最も高いのは下部組織「10以下」で26.3％）。

これら自治会の規模が大きく、さらに自治会に下部組織がない等、組織化されていない状況では、オーラル・ヒストリーから聞き取りを行った住民達が望む自治会の存在を多くの住民に周知することや、住民同士の顔が見える関係を構築することは難しいように思う。

それには、自治会規模をどのように捉えなおすのかということ、また現在の自治会規模のままであるならば、下部組織を丁寧に構築、マネジメントしていくことは必要不可欠なことのように思う。

例えば、１自治会の中でもエリアを細分化して、複数の班をつくり顔の見えるような近所同士の関係の中で、連携していくことが考えられる。また、班を取りまとめるリーダーが役員を担うなどして組織化し、全ての住民に対しての勧誘活動、さらには自治会活動への参加の促し等、住民誰もに「開かれた自治会」となることが望まれるのではないだろうか。

一方、他の自治会と連携、支えあうことも重要になってくるであろう。横浜市では、地区連合町内会といって各単位の自治会町内会長を中心に組織し、自治会同士の繋がりを模索している。横浜市町内会連合会のホームページには、「今日の地域活動では、あらゆる分野において、区域を越えた広域的な取り組みが必要となることが少なくありません。連合組織での協力が必要です。[41]」と、他の自治会との連携の必要性について触れている。これらもまた、コミュニティを維持、機能させていく一助になると言えるだろう。

⑸　コミュニティの可能性

ここでは、本論を通じて見えてきたコミュニティの可能性について考察していくこととする。

１）つなぎ役

Ｄさんは子ども会活動が衰退していく中、自治会と繋がったことで、自治会からのサポートが生まれ、活動を維持していく事が可能になっている。これには、第３者である小学校校長らが、接点のない子ども会と自治会の間を取り持ち、接点を作ったことが大きいだろう。この時は小学校校長が「つなぎ役」として、大きな役割を果たしたと言えるが、学校等の公的機関や福祉機関に留まらず、住民同士においても「つなぎ役」は十分、担う事ができると考える。

しかし、本論で見てきたように少子高齢化の進行や自治会の人手・人材不足、自治会組織

の未発達等を踏まえると、地域内の住民同士の力だけでは難しい現状にあると考える。そこで、地域外から地域内に働きかけることの出来る存在（行政や社会福祉協議会、NPOなど）が「つなぎ役」になることが必要になるように思う。その際には、地域内の住民が地域外の存在を受け入れる姿勢や、共に協働する意識づくりも求められるだろう。

２）地域の大人

オーラル・ヒストリーで聞き取り行い、現在、地域活動を担っている人々の共通点は、子ども時代に家族や友人関係だけでなく、「地域の大人」との関わりがあったということだろう。それは豊かな地縁の中で育まれてきたとも言える。また、自らが大人になると、三原で生活を続ける一方、自身も「地域の大人」となり、子ども達を見守る側になっている。

そういった意味で子ども時代に、家族以外の地域の大人と関わる機会があることは、コミュニティを維持、発展させていく上で重要だと言えるだろう。

おわりに

本論を通じ、強く感じたことは、長きに渡り三原で生活をする住民は、過去のコミュニティに対して、ポジティブな印象をもっていると言うことである。逆に、現在のコミュニティに対しては、ネガティブな印象をもっていたり、少子高齢化を寂しいと感じていることも見えてきた。

しかし、過去のコミュニティも決して万能だったわけではないだろう。強いつながりがかえって、住民自身を苦しめていたこともあるだろう。また、少子高齢化が今後さらに進行し、コミュニティが変化し続ける昨今において、過去のコミュニティをそのまま汎用させることはできないだろう。そのため、現在の地域状況を踏まえながら、これからのコミュニティの可能性を模索していく必要があることを強く実感するのである。

今回、オーラル・ヒストリーを通じて過去から現在までのコミュニティの変貌を明らかにしてきたが、まちづくりを検討していく上で、多くの住民から現在のコミュニティに対する思いや、未来への展望を把握していくことも同時に必要であることを痛感した。それは、住民１人１人の思いが反映されるようなまちづくりでないと、「真のまちづくり」にはならないからである。それらは次回の宿題としたい。

おわりに、聞き取り調査に協力いただいた住民の方々と三原自治会に感謝と敬意を表します。

注

1　後藤春彦・佐久間康富・田口太郎「まちづくりオーラル・ヒストリー」（2005）水曜社　６頁

2　八尾祥平「1960年代以降の沖縄における地域社会の変化～ひとりの女性のオーラル・ヒストリーを通して～」琉球・沖縄研究１号（2007）112-133頁

3　那覇市ＨＰ「統計情報」　2011年10月末現在

4　比嘉敬他「沖縄大百科事典・中」沖縄タイムス（1983）65-67頁
5　秋元律郎「那覇市の都市形成とその構造」山本英治、高橋明善編著「沖縄の都市と農村」東京大学出版会（1995）161頁
6　吉川博也「那覇の空間構造」沖縄タイムス社（1989）40頁-44頁
7　前掲注（5）164頁
8　前掲注（5）164頁
9　那覇市「那覇市統計情報」町字別人口表（2011）11月末現在
10　琉球新報「那覇市の自治会加入率21％　減少傾向続く」（2013.8.27）
11　1990年の「那覇市コミュニティ振興計画策定調査報告書」では、全戸加入型自治会15.0％、任意加入型自治会72.3％、郷友会型自治会はおよそ8.0％であると述べられており、任氏加入型自治会の多さがわかるだろう。
12　沖縄では「自治会や字が共有財産をもつ現象は普遍的に見られるが、それはGHQの「覚書」（1946年）により、日本法令の適用から除外されたから」である。高橋勇悦「都市社会の構造と特質」山本英治、高橋明善著「沖縄の都市と農村」東京大学出版会（1995）198頁
13　鈴木広「都市化の研究」恒星社厚生閣（1986）409-410頁
14　比嘉敬他「沖縄大百科事典・上」（1983）896頁
15　石原昌家「郷友会社会」ひるぎ社（1986）26頁
16　戸谷修「産業構造と就業構造の変動」山本英治、高橋明善著「沖縄の都市と農村」東京大学出版会（1995）225-227頁
17　同上229頁
18　同上229頁
19　前掲注（5）212頁
20　前掲注（5）213頁
21　前掲注（5）217-218頁
22　那覇市「那覇市統計情報」町字別人口表（2011.11月現在）
23　三原自治会「三原のあゆみ」（1984）14頁
24　新垣清輝「真和志市誌2/2」（1956）266頁
25　前掲注（23）14-15頁
26　前掲注（23）15-18頁
27　前掲注（23）26頁
28　「三原自治会の賛助会員年間会費徴収について」三原自治会長の挨拶文から（2011）
29　前掲注（24）272-273頁
30　前掲注（24）272-273頁
31　前掲注（24）26頁
32　「戦災からのあゆみ」那覇市市民課（1982）1-5頁

33　那覇市「那覇統計書」第1 ～ 50回（1982 ～ 2010）

34　三原共心会「創立80周年記念誌」（2007）9,52,53頁

35　三原自治会把握　3102世帯中419世帯加入（2011.11月現在）

36　鳥越皓之「「サザエさん」的コミュニティの法則」日本出版放送協会（2008）149頁

37　コミュニティ研究会「地域コミュニティの現状と問題」総務省HP（2007）

38　辻中豊「町内会・自治会など近隣住民組織に関する全国調査結果（暫定版）」平成18年度科学研究補助金特別推進研究（2007）7頁

39　横浜市市民協働推進事業本部「平成17年度自治会町内会の現況と予算決算状況調べ報告書」（2006）8頁

40　前掲注（38）7頁

41　横浜市町内会連合会「地区連合町内会（地区連）について」HPより